

原著 (Article)

近代繊維工場における女子労働者の福利厚生と教育

——愛知県と長野県の調査を中心に——

Education and welfare of female workers
in modern textile mill
– Centered on the study of Nagano
and Aichi Prefecture –

中野 典子^{*}
NAKANO, Noriko^{*}

馬場 景子^{**}
BABA, Keiko^{**}

キーワード：労働者教育，福利厚生，教育環境

Key words : workers' education, welfare, educational environment

1. はじめに

本研究は、1997年から愛知県の明治・大正時代の織物工場の一次資料群の分析を中心に女子労働者の衛生及び労働環境を中心に調査と分析を行ってきた。筆者たちが行った先行研究により、労働者に提供する工場食共同炊事場が我が国の「栄養概念」の普及のための情報発信であったことを明らかにした。今回、本稿で取り上げる内容は、先行研究の周辺課題として、女子労働者が多数を占める繊維産業では、労働の傍ら、教育が行われていたことに加え、女子労働者の余暇利用として手習い教育が始まり、制度を取り入れた教育への移行を概観することである。

労働者への教育は、近代化を推し進めるために1916年に施行された日本初の労働法である工場法により変化していった。さらに、工場法改正が行われた1923年以降、労働環境の見直しが行われた。労働制度という敷石が置かれたことにより、教育は手習いの段階から学校組織を工場敷地内に設備する工場が出現し、工場敷地外に教育施設が設立されるというプロセスを踏みながら女子労働者への教育は組織されていった。イギリスの社会学者であるT. H. マーシャルは、20世紀に確立した「社会的シティズンシップ」は「市民的シティズンシップ」と「政治的シティズンシップ」を補足するとともに、医療、教育、住居、社会保障などの社会的諸権利を保障することによって、資本主義社会における市場での再生産される階級的な不平等を軽減し平均化すると論じている¹⁾。工場法の施行(1916)以後の労働環境は、労働のみならず、労働者の教育環境の整備への段階的な変革であると共に、労働者の「社会的シティズンシップ」確立のための変革であったと言えるのかもしれない。

本稿では、先行研究で行った愛知県、長野県の調査及び関連諸資料から、近代から現代に至る繊維工場女子労働の教育変遷を俯瞰していく。

* 椋山女学園大学教育学部非常勤講師「子どもの食と栄養」

** 日本福祉大学非常勤講師

2. 紡績工就学程度と工場労働者の年齢に関して

近代の女子就労の問題点の一つとして、労働開始年齢の若年傾向がある。当然ながら、教育を受ける期間の短さと相関する。近代に日本では、官営富岡製糸場に代表されるように、殖産興業を目的とした軽工業に力点が置かれた。さらに、前近代の農村形態が、急激な社会変化の煽りを受け、その結果として、疲弊した農村から女子労働力を得ることが安易になり、安価な労働力として10才以下の子どもが、繊維産業での労働力であることは珍しい事ではなくなった。人的資源としての労働者保護を目的として「工場法」が施行されたが、就労年齢の規制に関しては、原則として「常時15人以上の職工を使用する者」（1条1項1号）及び「事業の性質上危険なるもの又は衛生上有害の處あるもの」（同項2条）と表されているように、適応外の工場は除外の対象であり、就労最低年齢に関しては、工場法施行時10才以上の者を引き続き就業する場合を除き、12才未満の者を就業させることが禁止された（2条1項）。労働者の年齢制限の徹底は工場法施行から7年を経た、1923年の改正で実現した。原則として14才未満の者の就労を禁止し、この規定により1916年施行の工場法が適応されなかった工場にも該当された。労働年齢の引き上げにより、就労以前教育期間の延長の可能性が生まれたこととなる。

次に、工場法の施行以前と以後の調査を行った『女工哀史』²⁾から繊維工場での女子労働者の年齢層と教育程度、加えて、繊維産業のメッカであった長野県諏訪地方の調査結果から女子労働者の年齢層と勤続年数を中心にみていく。

2-1. 『女工哀史』から見る紡績工場の就学程度

『女工哀史』は、細井和喜蔵が、1923年に雑誌『改造』に寄稿し、1925年に改造社から初版が出版された。同書は、細井が14才（1910）から紡績工場で働いた15年間の記録である。細井は紡績工の「教育問題」に関して8,627名の労働者を対象に就学程度の聞き取りを行った。労働者の男女比は16：84である。聞き取り対象者の就学程度の人数を数値しグラフ化したものが図1である。男子労働者に比べ女子労働者は、「義務教育中途退学」、「義務教育卒業」が圧倒的多数である。「高等小学校中途退学」、「高等小学校卒業」は、かなり低い数値を表している。男子労働者の就学程度は、女子労働者と比較すると「義務教育卒業」が25%弱、「高等小学校卒業」が約20%で次点となっている。女子労働者のほとんどが、「義務教育」に集中している。この理由は、1872年に発布された学制と1900年の改訂小学校令によって義務教育就学規定が背景にある。この規定により義務教育の無償化が定められたことで、就学率は90%以上になったとされる³⁾。しかし、グラフからは、「義務教育中途退学」が40%以上であることから、90%という数値が意味するのは、就学率は義務教育入学を意味していると考えられる。この数値傾向は、女子工場従事者だけが、就学程度が単に低いだけではなく、前近代から続く女子と教育の関連の希薄さの結果ともいえる⁴⁾。「中

学程度以上の諸学校入学」は、戦前までは、約 20% であったことを鑑みると、繊維工業の労働者の教育程度が低いことを意味している。「中学程度以上の諸学校入学」は戦前までは、約 20% であった。紡績工場教育程度の全体傾向としては、女子労働者の就学状況は、義務教育内終了が多く、「高等小学校入学」、「高等小学校卒業」は、男子労働者に比べ、女子労働者は極端に低くなっている。さらに、「不修学」の割合が男女に差はないが、男女とも約 20% の数値を示している。「中学程度以上の諸学校入学」は約 3% である。つまり、繊維産業の労働者の教育程度は全体として低かったことを意味している。

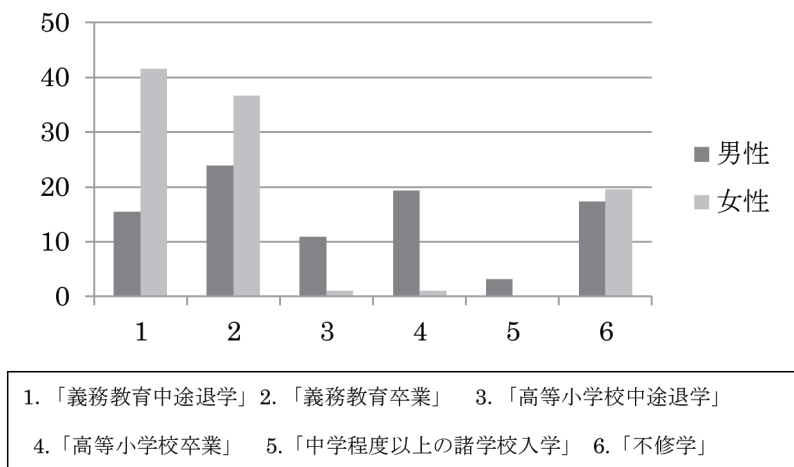


図 1. 紡績工場での教育程度男女比

2-2. 女子工場労働者の年齢と労働期間

細井の行った調査では、調査対象者の年齢が示されていないため、女子労働者の年齢層を知るために、1923 年に、長野県諏訪地方の女子労働者を対象に行った女子労働者の年齢分布を図 2 でグラフ化した⁵⁾。この調査は、『女工哀史』が出版された時期とほぼ時期が一致している。さらに、調査時期は工場法の改正が行われた時期とほぼ時期が一致している。このグラフから繊維産業関連の女子工場労働者の年齢層分布を概観することができる。また、この調査が行われた年は、工場法改正の時期と同年であることから、改正に伴う前出調査書類である可能性があると考えられる。

図 2 のグラフから 14 才から以下の女子労働者は 15%、15 才以下が 11%、16～20 才が 46% であり、全体の約 75% を占有している。1923 年の改正では、原則として前述したように、14 才未満の者の就労を禁止しており、この規定は工場法が適応されない工場にも適応された。14 才未満の者の就労禁止にも関わらず、14 才以下の女子労働者が 15% であることは、工場法施行から工場法改正の移行期間であり、労働現場との温度差があることを意味している。

図 3 は、就労期間をグラフ化したものである。勤続年数は 3 年以下が 56% と最も

多い。結婚までの就労前提として、雇用契約が結ばれたケースが多かった。因みに、1920年に行われた第1回国勢調査によると平均初婚年齢は、女性は21.2才であった。図2で、20才未満の女子労働者が70%を占めていることから、就労開始年齢の差があることを前提にしても、結婚までを契約前提として工場勤務をするケースが多かったと考えることができる。6年から8年以上の勤続年数に関しては、このグラフ自体が勤続年数のみを対象にしているため、労働者の勤務等級に言及していないが、富岡製糸場が伝習生育成機関であったことから考えると、長年勤務者の中には、指導者として工場に勤務した女子労働者の存在を現時点では明確にはできないが、後述する長野県岡谷の聞き取りから、長野県が指導者育成機関設立し、各工場に派遣される指導者（教婦）が、労働指導だけではなく、教育指導者として役割を果たしていることは、女子の勤続年数の期間と、勤務内容の関係の有無を考慮する場合、注目する必要があると考えられる。

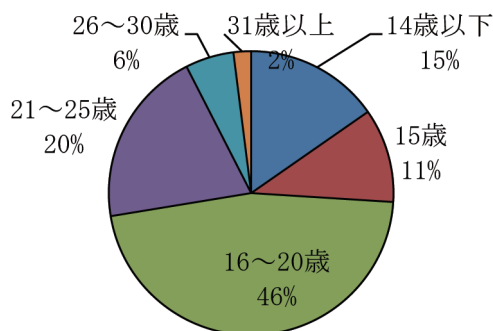


図2. 長野県諏訪地方の女子労働者の年齢分布（1923年）

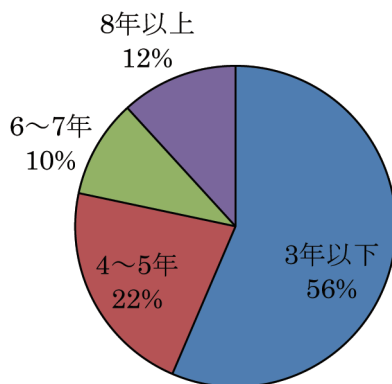


図3. 繰糸工女の勤続年数

3. 調査地からの女子工場労働者の教育に関して

先行研究での調査地での教育環境を以下で考察する。調査期間は 1997 年より現在 (2013) に至っている。調査地は以下の通りである。

調査地：鈴鎌毛織（愛知県尾西市 現一宮市）
 三河織物共同炊事場（愛知県蒲郡市）
 龍水社（長野県駒ヶ根市）
 長野県岡谷市（資料調査）

3-1. 鈴鎌織物（愛知県尾西市 現一宮市）

愛知県尾西市越（現一宮市）の調査内容は、1918 年に日本で最初に設置された工場食共同炊事場に関してであった。1997 年から資料調査及び、工場経営者、工場勤務経験者から聞き取りを行った。聞き取り調査は 1998 年に行った。調査対象は鈴鎌毛織の勤務経験者であった。教育に関しては、女子労働者のため、お花の先生を招聘した。また社主夫人が裁縫を教えた。1998 年の聞き取り調査では、H さん（男性、当時 90 才）によると、15 歳から 7 年間の年期奉公をし、年期開けには 30 円と袴、羽織を貰う。年期開けのお披露目を親戚・近所に行ったとの談であった。また I さん（女性、当時 75 才）は、年期開けに筆筭を受け取っている。この織物工場は、現在解散している。また、経営者によると、余暇として運動会や遠足を実施したとの談であった。

3-2. 三河織物共同炊事所（愛知県蒲郡市）

愛知県蒲郡市の共同炊事場は上記の愛知県尾西市（現一宮市）と同年 1918 年に工場食共同炊事場を組合立で設立した。組合立であることが、特徴である。1903 年に「愛知県三河織物同業組合」が愛知県知事から認可がおりた。筆者たちが調査を行った「三河織物共同炊事所」もまた組合立の炊事場であり、全国各地から視察者が訪れた記録が存在していた。当時の副理事長の談では、組合立の学校が戦後設立されたが、繊維業界の不況により廃校になった。

3-3. 龍水社（長野県駒ヶ根市）

長野県駒ヶ根市の龍水社は先行研究（中野・馬場 2012）で、製糸工場の教育の一端を紹介した。長野県伊那地方は、駒ヶ根の「龍水社」に代表されるように各組合の結社組織であった。現在は JA が「龍水社」を受け継いでいる。愛知県の調査地との違いは戦後、蚕産関連の機械技術から精密機械産業へと移行している。龍水社は指導者の育成を行うため 1920 年に定員 100 名の指導者教育機関を設立した。指導の育成と派遣により生糸の品質向上が認められた。また教育機関の教育内容は、単に繰糸の技術だけではなく、教養教育にも力を入れていた。戦後の 1948 年には働く者の学園

として長野県知事の認可を得て私立修徳学園を発足させた。中学校における教育を基礎として、本科4年、専攻科2年の教育期間を設定した。図4は龍水社の本科4年間、総時間数2960時間内の各教科が占める割合を示している⁶⁾。このグラフから、家庭科・国語・社会の教育に時間を掛けていることが分かる。

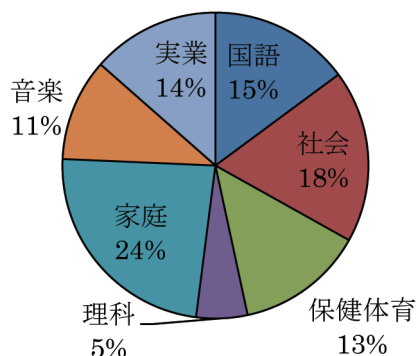


図4. 龍水社 本科の学習時間

3-4. 長野県岡谷市（資料調査）

長野県有数の繊維産業のメッカであった長野県岡谷は、良質な生糸の生産地であった。長野県岡谷は第1回国勢調査では総人口約44,000の内訳は、10代の女子が18,000人、20代女子が7,000人であった。教育内容は、工場の規模や就労の時代によって異なる。女子労働経験者のインタビューから教育に関する記述を次の表1に示した⁷⁾。

表1. 岡谷製糸産業労働経験者の談話からの引用⁷⁾

(1)紙座談会—岡谷の製糸—（座談形式）

- A：昔は勉強なんてそんなあれじゃなかったね。なにしろ仕事さえして、いい成績さえ取りやそれでー。夜どっかの先生が来て裁縫なんてやったが、それだって出る人はたんとあらずかねえ
- B：大正から昭和にかけてね、修養会ってあってね。裁縫、お茶、お花、習字とかね、そういうことやらしてくれてね。それでね、お仏壇に手を合わせて、それから社歌うたって、それでおしめえになった。
- C：わたしは昭和に入ってからだけど、松本の工場試験場を出た教婦って方がいて、糸取り以外の一応の作法だとか、場合によりゃ、ちょっとした勉強ね、簡単な勉強した。生け花なんか先生に頼んで教えていただいた。
- D：終戦後だが、お裁縫、編み物を習った。ちゃんと教室があって1日1時間、お花は30分で終わった。お針なんて1時間くらいやらないとできないじゃあ。一番困ったのはメートル、私、尺で育ったでしょ、ほいだで、物差しを

二つ買っというね。やった。

(2)製糸屋に嫁いで（インタビュー）

工女さんたちには着るものはほとんど会社でみてあげました。（中略）10 年間いるとだいたい嫁入り支度ができちゃったんですね。鏡台、お針箱から始まり、アイロン、茶筆筒、桐の筆筒というようにね。なぜかっていいますと、反物でもらっても縫わなきゃいけませんけれど、うちの会社には、私が来る前から自由学園ちゅう学校があったんです。教員の職員録にも乗っております。校長は工場の社長で、工場にいる従業員の方たちにいろいろ教えていたんですね。和裁は西堀の武井さん、編み物は、近くのお嬢さんとかね、そして洋裁は山岡さんのお嬢さんとか、お花は小口先生、音楽も岡工の先生が見えて、コーラスなんかよくやっていただいております。

(3)仕事後の習い事（座談形式）

夜 6 時から 9 時の間、お風呂に入った後の 2 時間半くらいの時間だけどみんなでお裁縫したり読書したり、舎監がいろいろ教えてくれたりさあ。ほして傍のお寺の坊さまがね、ひと月に 2 回くらい、国語を教えてくれた。そういうことは結構みんなが楽しかった。手芸や手仕事をやらあうんと部屋でやった。針仕事を覚える人や刺繍をやるとか、嫁にいってもなんとか役にたつようなことを短い時間のことだけど一生懸命習った。舎監って人がいい人だったので、いろいろ教えてくれた。お裁縫は教わりたきゃあ毎日だって、でも舎監が忙しかったからできなかった。嫌な人は何もしなくていい。みんな自由で他の先生とこへ行って教わりたいたいと言うと、それでは教えてやるから何時にと。修養室っていうものがあってね。それは自分たちの寝泊まりする部屋ではなくてね、読書したけりゃそこに本があってさあ、舎監がいろいろ教えてくれた。

(4)（座談形式）

いろいろ学校あったんですね。家庭科から英語まで。一通り全部教育されました。お茶、お花、お嫁に行くにも改めて習うこともなく、全部会社で身につけていただきました。

(5)（インタビュー）

新米の工女さんにはちゃんと先生がついて袴はいて、来ちゃね、勉強も教えたりして。ヤマキョウって会社は大きくて、いい工場だったからね、ほかんとこ行きゃ、先に来た上手の人が教えたが、あそこは県からね、教師と言う人が来て、そいで学問も教えたり、糸のことも教えたり、学校みたいなところね。講堂があって、休みがある。1 日と 15 日 2 回。そういう時には男の先生と女の先生が付いてよかった。なかに図書館もあってね。図書館から本を借りちゃね、一日中仕事をしている間に 9 時とか 3 時とか休みがあるときは、そんな本でも読んだり、そうして勉強しただよ。

表の(1)からは、座談形式参加者の年齢及び就労時期によって教育の内容が異なっていることが分かる。Aの勤務工場には、教育設備が工場内になかった。指導者が社主の依頼を受け、稽古に来ていた様子がうかがえる。習い事よりも仕事重視の感がある。Bの就労期間は、大正から昭和にかけてである。教育機関の前段階の習い事段階であるが、裁縫、お茶、お花、習字と習い事に多様性が見られる。Cは、長野県が1920年に長野県製糸教婦養成規定により育成された指導者が役割拡張傾向が見られる。Dの就労が戦後であることが、本人から話されている。指導内容の他に教室設備があり、決まった時間での教育が行われていることが分かる。

(2)では、「自由学園」という教育機関の存在を示している。繊維産業の女子労働者教育のために、技術習得者とか、近隣の学校の教員が、コーラスの指導を行ったと言っていることから、女子労働者への教養教育が行われていたことは注目すべきことである。

(3)では、舎監と僧侶が教育に携わっている様子が分かる。教婦が実務教育以外に携わっていないか、もしくは教婦がいない規模の工場か、あるいは教婦派遣以前の時期に就労していたのかと推測される。

(4)は、家庭科から英語までと言っているように、戦後の教育を受けていることが分かる。勤務時の就学程度は不明であるが、工場勤務と学校教育が並行しながら行われていた可能性が高い。

(5)に関しては、教員が袴、教師と言っているが、教婦のことを意味しているのであろう。講堂・図書館の教育施設があったことから、規模の大きい工場であったとの推測できる。

3-5. 考察

教育内容は工場の規模・時代により異なっている。工場内女子教育の初期段階は鈴鎌毛織や岡谷(1)A、B、岡谷(3)であり、教育内容は習い事の延長であったことが分かる。次の段階として、岡谷(1)C、岡谷(5)は教婦による実業以外の指導であった。教婦による教育は長野県以外でも同じような教育が行われた可能性がある。岡谷(1)Dは、専修学校以前の教育体制であった可能性がある。岡谷(2)(4)は、専修学校、特に、岡谷(4)は戦後の専修学校の形式をとっている。また愛知県蒲郡市の設立された組合立の学校に関しては詳細を調査中であるが、指導教科などを調査する必要があると考えている。龍水社での、総教育時間の86%が実業以外であることは、繊維工場の女子労働者への教育が教養教育であることが注目される。

工場の規模等を鑑みても、いずれの工場労働者も何らかの教育が施されていたという点において、教育が工場製品の品質向上を目指すのみならず繊維工場の女子労働者の知識向上も視野にいれ行われてきたと推測できる。

5. ま と め

日本が、近代化を推進するにあたって、従来の社会体制は引き続いて存在していた。急速な変革は、旧来の伝統社会の中にあった民衆の意識の速度の差が生じ、定着するまでにかなりの時間を要している。工場法の施行により 10 才以下児童の労働が禁止され、さらに、工場法改正によって 14 才以下の労働も禁止された、その結果として就学期間が延長された。工場法施行前後の繊維産業では「手習い」程度の教育の教育が行われていたが、次第に、教養教育が施されるようになっていった。本論では取り上げた、女子労働者への教育は、当初は手習いであった。良妻賢母を視野に入れた日本の伝統的な教育が根幹にあった。教育の場は、工場の規模あるいは、経営団体により差異はあったが、次第に、教育の内容も多岐に渡るようになっていく。そして、企業内学校、専修学校、専門学校、短期大学、大学に形を変えていく。繊維産業女子労働者への教育体制の変遷は、女子労働者の教育をうける権利の拡張であったのかもしれない。前述した各シティズンシップへの教育の関与は、重要な証左となり得ると考えられる。

■引用資料

- 1) 法政大学大原社会問題研究所／原伸子編：福祉国家と家族，法政大学出版（2012）
- 2) 細井和喜蔵：女工哀史，改造社（1925）
- 3) 新堀通也編：日本の教育—現代教育シリーズ 9，有信堂（1981）
- 4) 玉川寛治：製糸女工と富国強兵の時代，新日本出版社（2002）
- 5) <http://www.pref.tottori.lg.jp/117072.htm>
- 6) 龍水社 70 年史刊行委員会編：龍水社 70 年史，上伊那郡蚕糸販売工業利用農業協同組合連合龍水社（1984）
- 7) 岡谷蚕糸博物館紀要編集委員会：岡谷蚕糸博物館紀要 1～10，岡谷教育委員会（1996～2006）

■参考資料

- 馬場景子，中野典子：「栄養学から見た女工の食事」『ジェンダー研究』第 2 号，（財東海ジェンダー研究所（1998）（平成 10 年度研究助成論文）（法政大学大原社会問題研究所収蔵）
- 中野典子，馬場景子：「工場法改正における食と健康関係書類の研究—大正 12 年度と昭和 4 年の改正に伴う『献立予定表』の分析を中心として」『日本食生活文化調査報告書 20』（財日本食生活文化財団，（2001）（平成 13 年度研究助成対象論文）
- 中野典子，馬場景子：「共同炊事の黎明(1)—一起共同炊事組合の運営を中心に」『椋山女学園大学研究論集』第 37 号，「自然科学編」2006
- 中野典子，馬場景子：「共同炊事の黎明(2)—愛知県共同炊事場と埼玉県川越市栄養食配給所の比較—」『椋山女学園大学研究論集』第 38 号「自然科学編」（2007）
- 中野典子，馬場景子：「『工場飲食献立表』にみられる栄養概念普及活動の背景—愛知県工場食共同炊事場の資料分析を中心にして—」『椋山女学園看護学研究 Vol. 3』（2011）
- 中野典子，馬場景子：「近代の製糸工場における女子労働者の教育制度の変遷—長野県駒ヶ根市「龍水社」の実業教育の変遷」『椋山女学園教育学部紀要 Vol. 6』（2013）
- 山本茂実：あゝ野麦峠，朝日出版社（1968）
- 隅谷三喜男：日本職業訓練発達史 上下，日本労働協会（1971）

- 岡 実：工場法論，有斐閣書房（1913）
山本吉人：女子労働法制，一粒社（1987）
小林 巧：婦人労働者の研究，時潮社（1976）
農商務省編：職工事情，名著刊行会（1965）
東條由紀彦：製糸同盟の女工登録制度，東京大学出版（1990）
三瓶孝子：働く女性の歴史，日本評論社，（1956）
矢木明夫：岡谷の製糸業—信州上一番，日本経済評論社，（1980）